## 空間拡散過程を考慮したパルサー星雲の 一次元モデル



## 石崎 涉 (東京大学理学系研究科 物理学専攻 D2)

共同研究者:浅野勝晃 (宇宙線研究所)

### Introduction - パルサー星雲-

- 回転駆動型パルサーの周囲に広がる天体
  - ・ 数pc程度に広がって存在
  - 中の詰まった繭状の構造
- 電波からγ線まで広がる非常にbroadなspectrum
  - ・ パルサー風がISM( or SNR)と相互作用して衝撃波を形成
  - パルサー風のe<sup>±</sup>が加速され非熱的放射
- 例:メシエ天体 M1「かに星雲」 (SN1054)



(X : NASA , radio : NCSU) G21.5-0.9





### パルサー星雲の空間分解観測

- X線放射の空間分解観測
  - X線放射を出す粒子は、星雲内に存在する最高エネルギーの粒子
    - ⇒ X線放射の空間分布は、高エネルギー粒子の伝播過程の重要な手がかり

G21.5-0.9

b)



### 空間分解観測のデータを生かせる 1次元のBroadband spectrumモデルを構築する!





# もくじ

- 1. Introduction
- 2.1次元定常モデル
- 3. 定常拡散モデル
- 4. 拡散過程の反作用の定式化

# もくじ

### 1. Introduction

- 2.1次元定常モデル
- 3. 定常拡散モデル
- 4. 拡散過程の反作用の定式化

## パルサー星雲の標準的描像

- 一次元定常モデル Rees & Gunn (1974), Kennel & Coroniti (1984)
  - 終端衝撃波での粒子加速を仮定
  - 加速粒子は放射冷却しながら流体とともに移流する
  - ・ 粒子のエネルギー・空間分布を計算
     かに星雲のSED・膨張速度をよく説明
    - ⇒ 星雲の標準モデルとして受け入れられた





#### 1D steady model-

- KC modelの問題
  - KCモデルは、3C 58やG21.5-0.9といった他のパルサー星雲のX線の表面輝度分布を説明しない(Ishizaki+17)
  - SEDを説明するために必要な磁場強度の もとでは、星雲の外縁部に到達する前に 冷却でエネルギーを失ってしまう

#### G21.5-0.9





### Motivation – Improvement of the 1D steady model-

- X線の放射領域の問題を解決するには…
  - 放射冷却を抑える過程
  - より効率的に粒子の空間的分布を拡げる過程
- パルサー星雲の拡散モデル
  - シミュレーションは星雲内に乱れた磁場の存在を示唆
  - Tang & Chevarier (2012)
    - 拡散で3C 58, G21.5-0.9のphoton indexの半径依存性を説明
  - Porth et al. (2016)
    - Test particleで3D simulationから拡散係数を推定
    - 得られた拡散係数を用いて1D steady modelを構築
  - X線の拡がりを説明するためにはκ~10<sup>27</sup>cm<sup>2</sup>/sが必要
  - ・ ただし、いずれも「表面輝度分布のプロファイル」のみ議論
- 問題点
  - X線の放射領域の問題は、SEDから期待される磁場の強さが、
     表面輝度分布を説明するには強すぎるのが本質





Motivation – Improvement of the 1D steady model-

- X線の放射領域の問題を解決するには...
  - 放射冷却を抑える過程
  - より効率的に粒子の空間的分布を拡げる過程
- パルサー星雲の拡散モデル
  - シミュレーションは星雲内に乱れた磁場の存在を示唆
  - Tang & Chevarier (2012)
    - 拡散で3C 58, G21.5-0.9のphoton indexの半径依存性を説明
  - Porth et al. (2016)

拡散係数を考慮した1次元定常モデルは、

- 先行研究の拡散係数で星雲のSEDを再現できるか?
- ・ ただし、いずれも「表面輝度分布のプロファイル」のみ議論
- 問題点
  - X線の放射領域の問題は、SEDから期待される磁場の強さが、
     表面輝度分布を説明するには強すぎるのが本質

⇒ SEDと表面輝度を同時に検証すべき!

「粒子の空間拡散」を考慮することによるKCモデルの改良



## Model – Overview-

- (仮定)
- 衝撃波下流の流れは、KCモデルを採用
- 拡散係数は空間的に一様とする
- 接触不連続面以遠で流体による移流の効果なし
- 星雲の年齢以内で到達できる拡散距離以遠では 粒子が存在しないとする

- ・1次元・定常拡散モデル
  - 終端衝撃波での粒子加速
  - ・ 粒子は、星雲内の流れに押し流されると同時に、星雲内の乱れた磁場に散乱されながら広がっていく
  - 接触不連続面の外にも拡散して広がる効果を考える



Model –Energy distribution & Radiation-

 $\kappa = \kappa_0 (E/E_h)^{1/3} \propto E^{1/3}$ 



• n(E,r):半径 rにおける粒子のエネルギースペクトル

- Photon spectrum
  - ・ シンクロトロン放射
    - KCモデルによって与えられる各点の磁場を利用
  - ・ 逆コンプトン散乱
    - ・ 非散乱光子は 天体中に一様に分布していると仮定
    - ・ 実際の天体と比較する際にはGALPROPモデルを採用

視線方向に積分

- ・ 観測量との比較
  - n(E,r)から単位体積あたりの放射率j<sub>v</sub>が得られる

• SED: 
$$F_{\nu} = \frac{1}{4\pi D^2} \int_{r_s}^{r_N} j_{\nu} 4\pi r^2 dr$$

• 表面輝度分布 :  $B_{\nu}(s) = \int_{\min(r_s,s)}^{r_N} \frac{j_{\nu}rdr}{\sqrt{r^2-s^2}}$ 





積分

## Result

G21.5-0.9 Given Parameters Symbol  $\mathbf{KC}$ AD Spin-down Luminosity (erg  $s^{-1}$ )  $3.5 \times 10^{37}$  $L_{\rm sd}$  $4.8^{\mathrm{b}}$ Distance (kpc) DRadius of the nebula (pc) 0.9 $r_{\rm N}$ Fitting Parameters Break Energy (eV)  $E_{\rm b}$  $2.6 \times 10^{10}$  $6.0 \times 10^{10}$ Low-energy power-law index 1.11.02 $p_1$ High-energy power-law index 2.32.5 $p_2$ Radius of the termination shock (pc) 0.050.05 $r_{s}$  $1.0 imes 10^{26}$ Diffusion coefficient with energy  $E_{\rm b}$  $\kappa_0$ Exterior magnetic field  $(\mu G)$  $B_{\text{ext}}$ 40Magnetization parameter  $2.0 \times 10^{-4}$  $6.0 imes 10^{-4}$  $\sigma$ 

- Target
  - 若いパルサー星雲 G21.5-0.9
  - 多波長の観測結果が豊富で、X線の空間観測分解がある



			G21.5-0.9	
	Given Parameters	Symbol	$\mathbf{KC}$	AD
このときの乱流磁場強度は? δB/Bの値は?	Spin-down Luminosity (erg $s^{-1}$ )	$L_{\rm sd}$	$3.5 \times 10^{37}$	
	Distance (kpc)	D	$4.8^{b}$	
	Radius of the nebula (pc)	$r_{ m N}$	0.9	
	Fitting Parameters			
	Break Energy (eV)	$E_{\rm b}$	$2.6 \times 10^{10}$	$6.0  imes 10^{10}$
	Low-energy power-law index	$p_1$	1.1	1.02
	High-energy power-law index	$p_2$	2.3	2.5
	Radius of the termination shock (pc)	$r_{\rm s}$	0.05	0.05
	Diffusion coefficient with energy $E_{\rm b}$	$\kappa_0$	-	$1.0  imes 10^{26}$
	Exterior magnetic field $(\mu G)$	$B_{\rm ext}$	-	40
	Magnetization parameter	$\sigma$	$2.0 \times 10^{-4}$	$6.0 \times 10^{-4}$

#### Target

Result

- 若いパルサー星雲 G21.5-0.9
- 多波長の観測結果が豊富で、X線の空間観測分解がある

- 表面輝度分布
  - X線の表面輝度分布をよく再現
  - TeVの放射領域は、電波・X線の2倍程度までひろがる





# もくじ

- 1. Introduction
- 2. 1次元定常モデル
- 3. 定常拡散モデル
- 4. 拡散過程の反作用の定式化



## 定式化

- "流体静止系"をどう決めるか?
  - 如何に非熱的粒子の集団だとはいえ、"流体"は集団運動して見える
  - ・ 速度分布が等方に見える座標系があると思って、それを"流体静止系"と思う
- 出発点
  - Boltzman方程式(等方拡散)



## Result

- 拡散過程による減速
  - 球対称系では拡散は総計で外向きの流束を作る
    - ⇒ 運動量が半径方向に持ち出される ⇒ 反作用で流体は減速



## Result

 $σ=3 × 10^{-4}$   $r_s=0.05 pc$   $L_{sd}=3.5 × 10^{37}$   $r_N=2.0 pc$   $γ_1=2.2 × 10^4$   $κ=3.0 × 10^{26} (E/1TeV)^{1/3} cm^2/s$ 

- 拡散過程による減速
  - 球対称系では拡散は総計で外向きの流束を作る
    - ⇒ 運動量が半径方向に持ち出される ⇒ 反作用で流体は減速



## Summary

- ・まとめ
  - パルサー星雲の球対称・定常の拡散モデルを構築した。このとき、拡散による星 雲外への粒子の逃げ出しと、逃げ出した粒子からの放射まで考慮した
  - これをG21.5-0.9に適用し、星雲全体のスペクトル(SED)とX線の表面輝度分布を同時に再現することに成功した
  - このようなパラメータのもとでは、TeV程度のガンマ線は逃げ出した粒子からの寄 与が大きくなることを示した。さらに、この場合TeVガンマ線の放射領域の拡がりは、 X線や電波のそれの2倍程度まで広がることも示した。
  - 拡散の反作用を考慮した流体方程式の定式化を行った
  - 拡散の反作用は流体を減速する方向に働く可能性があること、また反作用を考慮しないモデルで用いた拡散係数の大きさでも、流体構造に拡散の効果が表れていること、を示した。
- 課題
  - 拡散の反作用を考慮した流体方程式のもとでの、星雲の放射計算
  - 拡散係数が放射へどのように影響を与えるかの系統的な調査
  - より現実的な拡散係数のモデル化、および境界条件の取り扱い